保育における幼児理解のあり方
―幼児理解の実態分析―

How to understand infants in childcare
-Analysis of the actual situation of understanding infants-

細　川　隆　史　・　大　竹　留　美　・　後　藤　紀　子
Takashi HOSOKAWA, Rumi OTAKE & Noriko GOTO

* Key Words: 幼児理解・５つの領域・保育者の専門性・保育者の力量形成・教育課程

１．はじめに

保育の基本は、「保育者の幼児理解（子ども理解）にある」（本文では、幼児理解と子ども理解は同義語として把握する）といわれるように、保育に携わる際に子ども達とどのような形で向き合い理解するのかは、保育者によって、大きく違いが出る。

例えば、園庭で草花に興味津々の子どもの傍らに寄り添う保育者がいるとする。「あの子どもは、今どこに興味を示しているのか？色を観察しているのか？それともにおいに気づいた？」「なぜいつまでも草花を観察しているのだろうか？」などと、保育者は子どもの心中を察しながら関わっているだろう。保育現場に立つ者の視点では、これはよくある幼稚園･保育所等での一コマであるが、幼児理解に基づいた、子どもの「今！」「この時！」のありのままの子どもの姿に対して援助・配慮する行為が幼児理解としての行動である。保育を展開していくにあたり、必要となる幼児理解であるが､「理解する」ことは､何を意味するかと分析するにあたり､まずは「理解」の意味を捉える。

広辞苑（第７版）を紐解くと、「理解」とは、「①物事の道理をさとり知ること。意味をのみこむこと物事がわかること。了解。②人の気持や立場がよくわかること。」とある。

保育において幼児理解という言葉は、現場では当たり前のように使用している言葉であるが、改めて幼児理解をすることの重要性が指摘される昨今、幼児理解についての園内での保育検討や研修会の実施が増加している。保育の場においては、幼児理解について重要であるとする保育者がほとんどであるが一方で、幼児理解についての考え方・意識は、個々の保育者で相違がある。

例えば、クラスの子どもたち１人ひとりへ向ける幼児理解を、同僚保育者と共通した認識にすることはかなりの困難を伴う。そして､担当する子どもたちにとってより良い保育実践ができるよう、幼児理解をどのように生かすと良いのか、いかなる視点で保育に見通しを持つと良いのかを考えることは様々な保育観を持つ保育者集団の感性を同調させることについても、同様に困難を伴っている。

また、幼児教育・保育系の研究論文や保育者の事例紹介や投稿文を見ても同じ事が言える。それは、研究者の関心や専門的視点により、幼児理解の考え方は多種多様であり、子どもへの視点を研究の対象とすることが同じであっても、幼児理解の定義を絞り込むことは困難である。

「幼稚園教育要領解説」によると「幼児の主体的な活動を促すためには、教師が様々な関わりをもつことが重要であることを踏まえ、教師は、理解者・共同作業者など様々な役割を果たし、幼児の発達に必要な豊かな体験が得られるよう、活動の場面に応じて、適切な指導を行うようにすること」とある。そこで「保育者の役割」の書かれる「幼稚園教育要領解説」記載事項を精読し、(表１）にまとめた。

（表１） 保育者の役割

①幼児のよき理解者	教師は幼児一人一人に適切な援助ををするためには、幼児の生活や遊びの経験を把握し幼児の実態を<u>理解</u>を得ること。そして幼児がどこで、誰と何をしているかをしっかり、とらえておく必要がある。こうした幼児理解は幼児一人一人を教師が認知するために必要であり、援助の立場からも不可欠である。
②幼児との共同作業者、共鳴するもの	幼児は全身で、気持ちを表現する。教師は幼児に合わせ同じ様に動く、同じ目線に立って見つめる。同じものに向かうことによって、幼児の心の動きや行動が<u>理解</u>できる。幼児と向き合うのではなく、同じ向きで動きを共有することである。
③憧れを形成するモデル	教師がある活動を楽しみ、集中して取り組む姿は、幼児を引き付けるものとなる。よって、教師は、演技者や表現者のようにその姿を見る者が、憧れをもち引きつけられるように自らを形成する必要がある。また、幼児は、教師の日々の言動や行動する姿をモデルとして善悪の判断、いたわりや思いやりなどの道徳性、生活上のきまり、場面に応じた言葉といった多くのことを学ぶ。このようなことから、教師は自らの言動が幼児に影響を与えることを認識しておくことが必要である。
④援助者	幼児の遊びが、深まっていなかったり、課題を抱えているときの教師の援助は大切である。それは、幼児ができるだけ自分で困難を乗り越えようとする気持ちを大切にして援助を行う必要があり、そのタイミングを見極める必要がある。それには、 幼児の実態をよく<u>理解</u>し、一人ひとりの発達に応じた援助の仕方が必要ある。
⑤ 心の拠り所（精神的安定）	幼児が主体的な活動に取り組めるには、幼児が幼稚園で安定することが前提である。教師が受け止め、受け入れることが重要で、幼児と信頼の絆をつくり、親にとっても心の拠り所となる必要がある。

※下線は、筆者らが追記

（表１）を見てわかるように、保育者の役割は、幼児理解に集中してつながっている。また、ベネッセ教育総合研究所（2019）は、全国各地の国公私立の幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園の園長以下管理職を対象に『幼児教育・保育についての基本調査』（表２）についても、保育者にとって特に必要となる研修は「特別な支援を必要とする子どもの理解や保育」が園種を問わず約７～８割を占めた他、「子どもの成長・発達についての理解」等、幼児理解や保育においての実践に関連する研修が必要であるとの結果が出ている。

これらのデータを概観するだけでも、保育の質へと繋げる事が期待できる保育者の資質能力向上のためには、実践過程の中でいかに幼児理解を深められるかが問われているといえるだろう。

（表２） 保育者にとって特に必要だと思う研修の内容

表示：%

	幼稚園		保育所		認定こども園	
	国公立	私立	公営	私営	公営	私営
特別な支援を必要とする子どもの理解や保育	89.4	81.5	86.4	78.8	89.9	80.9
子どもの成長・発達についての理解	69.1	68.2	71	74.7	77	70.8
幼児（３～５歳児）の保育の内容、方法	55	50.1	68.5	74.3	75	71.3
指導計画の作成	49.5	37.3	49.4	49.8	60.8	47.7
保育記録、ドキュメンテーション	48.3	28.8	36.2	34.8	48.6	44.9
指導要録・保育要録・こども要録の記載	41.3	39.2	53.7	50.4	55.4	56
子どもの人権	33.2	12.7	33.8	36.8	31.1	30.2
子どもの病気と対応	24.6	34.3	43.1	49.6	41.2	46.8
乳児（０～２歳児）の保育の内容、方法	6.1	11.3	71.1	76.7	70.9	73.9

第３回 幼児教育・ 保育についての 基本調査 /ベネッセ教育総合研究所 （2019）より筆者らが作成

現場の保育者や、保育者を目指す学生が目にする資料に、文部科学省「幼児理解に基づいた評価」の冊子がある。本資料は、平成元年の幼稚園教育要領改訂以後、平成４年10月に初版を刊行し、平成16年９月に一部を修正、平成21年の幼稚園教育指導要録の改善に合わせて、記述内容を加筆修正し、平成29年３月に幼稚園教育要領が改訂されたことを受けて記述内容を変えるなど、時代に合わせる形で改定を重ねている。本研究は、この資料における幼児理解のあり方を明らかにすることで、保育者の必須の専門性とされる幼児理解の基本的な考え方が明らかになるのではないかと期待を持つ。資料の随所に盛り込まれている内容を紐解くことは、保育者の力量や知識、技術の中で根幹的なキーワードが出現することができると考える。

２．方法

２-１　対象文献より抽出

本論では、2019年文部科学省より発行の「幼児理解に基づいた評価」（文部科学省2019.　３）を用いた、テキストマイニングを実施する。

２-２　分析の手続き

分析は上記の対象文献より抽出した語に対するテキストマイニングをKHcoder-3b03a.（樋口, 2021）を用いて実施した。同時に、各語句の共起関係を設定し、得られた共起ネットワークから、頻出語句について検討した。

この手法を用いた研究としては、例えば、「保育実習での評価の傾向に関する研究 ―テキストマイニング分析による頻出語の可視化の試み―」（阿部ら2020）があり、保育実習における評価の傾向についてテキストマイニングを用いて検討しているなど、今回調査したい資料内容の傾向をみるには、適した手法であると判断し採用した。

３．結果

「幼児理解に基づいた評価」において、どのような語句が使用されているかについて計量的分析を試みようと、テキストマイニングによる形態素解析を行った。その結果、抽出された語句の総数は、38,986語であった。また今回検討を実施した動詞・サ変名詞・名詞についての抽出語句数は27,074語であった。では、テキストマイニングにより得られた結果より、名詞句について見ていく。

３．１　「幼児理解に基づいた評価」に使用されている出現回数100以上の名詞句について

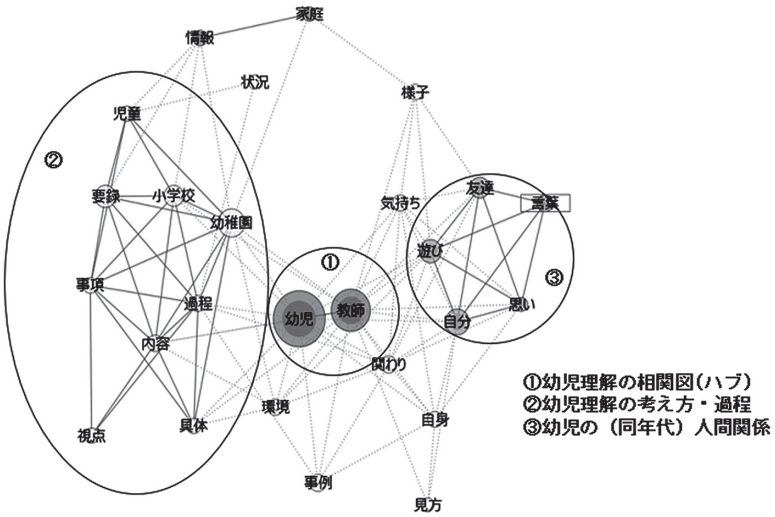
抽出語の中で、まず名詞句についてみてみる。表３は、「幼児理解に基づいた評価」で使用されている名詞句のうち、出現回数が100以上の抽出語に関し、出現回数を頻度順に示したものである。

最も出現回数の多い1,713回の語句は「幼児」であった。次は、「教師」が抽出されており、抽出語句数は893回であった。続いて「幼稚園」383、「自分」318、「遊び」260、「要録」233、「小学校」203、「友達」202となっている。

（表３）「幼児理解に基づいた評価」に使用されている出現回数100以上の名詞句

名詞句	頻度	名詞句	頻度	名詞句	頻度
幼児	1713	事例	135	事項	110
教師	893	関わり	130	自身	110
幼稚園	383	言葉	127	情報	107
自分	318	内容	124	様子	107
遊び	260	気持ち	118	具体	102
要録	233	環境	117	児童	102
小学校	203	過程	115	視点	101
友達	202				

名詞句の抽出語間の関連性を探求するために、表１の出現頻度上位100位までを利用した抽出語間の共起ネットワークを用いて実施した。それによると、「幼児」と「教師」のつながりが大きく中心にみられる。そして「幼稚園」と「小学校」「児童」「要録」「事項」「過程」「内容」「具体」「視点」のまとまりがみられる。また、「遊び」「友達」「言葉」「自分」「思い」のまとまりがみられる。「情報」「家庭」のつながりが厚く、関わりは薄いものであるが「状況」「様子」、「関わり」「自身」「環境」「事例」「見方」がみられる。ここで注目したいのは、「内容」「言葉」「環境」の保育内容に関する抽出語がみられる。



（図１）「幼児理解に基づいた評価」に関する名詞句の抽出語間の共起ネットワーク

名詞句の結果においては、幼児教育の評価に関することが、一目瞭然と見えてくる。つまり、最も出現回数の多い「幼児」についで、「教師」が抽出されている。これは、幼児理解の相関図といえるまとまりである。「自分」、「遊び」、「要録」、「小学校」、「友達」に関しては、「幼稚園」における関わりが深い語句である。それは、「自分」を確認し始める場所であり、「遊び」を展開する場所が「幼稚園」であるからだ。「要録」は、幼稚園における記録を意味し、「小学校」との連携、「友達」との成長発達を見据えた教育・生活を送る場所である。それは、名詞句の共起ネットワークにも顕著にみられる。「幼児」と「教師」のつながりが大きく中心にみられる。そして「幼稚園」と「小学校」「児童」「要録」「事項」「過程」「内容」「具体」「視点」のまとまりがみられる。また、「遊び」「友達」「言葉」「自分」「思い」のまとまりがみられる。「情報」「家庭」のつながりが厚く、関わりは薄いものであるが「状況」「様子」、「関わり」「自身」「環境」「事例」「見方」がみられる。ここで出現した「内容」「言葉」「環境」は、保育内容５領域に関わる抽出語である。

３．２　「幼児理解に基づいた評価」に使用されている出現回数100以上の動詞句について

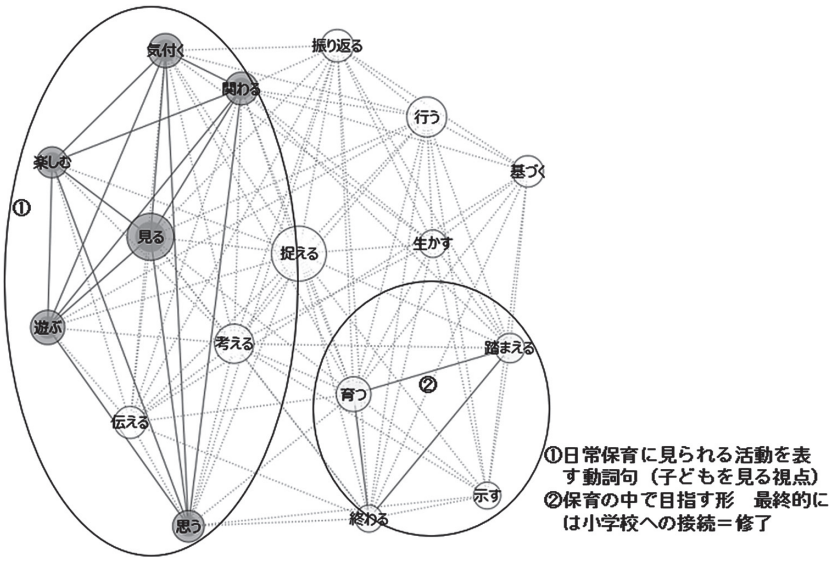
次に、抽出語の中の動詞句についてみてみる。表４は、「幼児理解に基づいた評価」で使用されている動詞句のうち、出現回数が100より多い抽出語に関し、出現回数を頻度順に示したものである。

最も出現回数が多かった動詞句は「捉える」で333回であった。続いて、「見る」241回、「行う」173、「考える」165、「育つ」130、「遊ぶ」126、「気付く」125となっている。

（表４）「幼児理解に基づいた評価」に使用されている
出現回数100以上の動詞句

動詞	頻度	動詞	頻度
捉える	333	関わる	115
見る	241	振り返る	112
行う	173	伝える	109
考える	165	思う	106
育つ	130	基づく	104
遊ぶ	126	楽しむ	102
気付く	125		

また、動詞句の抽出語間の関連性を探求するために、表４の出現頻度上位100位までを利用した抽出語間の共起ネットワークを用いて実施した。（表４）をみると、中心に「捉える」が出現している。そして､「見る」「関わる」「気付く」「楽しむ」「遊ぶ」「思う」のまとまりがある。「育つ」「踏まえる」「終わる」のまとまりもみられる。関りは薄いものの「振り返る」「行う」「基づく」「生かす」「示す」「伝える」「考える」がみられる。



（図２）「幼児理解に基づいた評価」に関する動詞句の抽出語間の共起ネットワーク

動詞句については､最も出現回数が多かった「捉える」は､教育者が常に行う行動である。「見る」､「行う」､「考える」､「育つ」､「遊ぶ」､「気付く」についても幼児教育現場においては必須の語句である。その動詞句の共起ネットワークには、「見る」「関わる」「気付く」「楽しむ」「遊ぶ」「思う」のまとまりがある。これらの語句から考えられる保育内容とのつながりは、「見る」「関わる」「気付く」「楽しむ」「遊ぶ」「思う」のどの語句にもよみとることが出来る。つまり､「表現」「環境」「人

間関係」「言葉」「健康」の保育内容５領域を網羅しているといえよう。また、「育つ」「踏まえる」「終わる」のまとまりからも教育・保育が基盤にある語句である。「振り返る」「行う」「基づく」「生かす」「示す」「伝える」「考える」は、日常の教育に大切な行動となる語句であるといえよう。

３．３　「幼児理解に基づいた評価」に使用されている出現回数100以上のサ変名詞句について

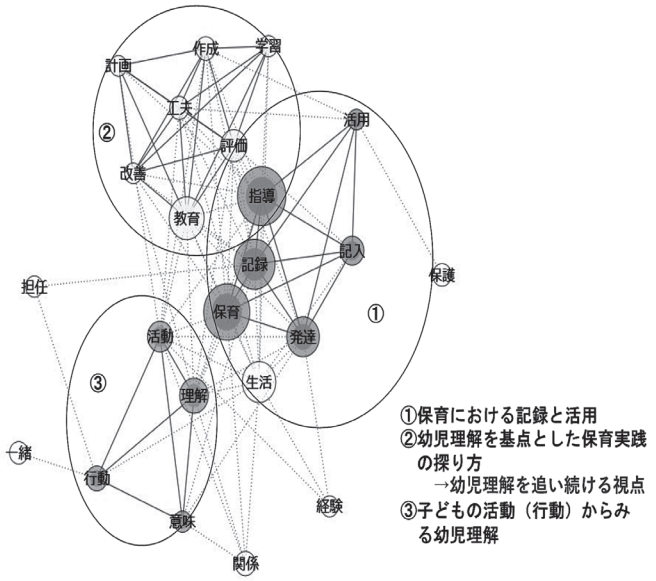
更に、抽出語の中のサ変名詞句についてみてみる。表３は、「幼児理解に基づいた評価」で使用されているサ変名詞句のうち、出現回数が100より多い抽出語に関し、出現回数を頻度順に示したものである。

最も出現回数が多い抽出語は、715回で、「指導」であった。次は、「保育」で649回であった。続いて、「記録」510、「教育」366,「理解」359、「生活」335、「発達」318、「評価」202となっている。

（表５）「幼児理解に基づいた評価」に使用されている
出現回数100以上のサ変名詞句

サ変名詞	頻度	サ変名詞	頻度
指導	715	評価	202
保育	649	活動	186
記録	510	記入	162
教育	366	行動	120
理解	359	関係	113
生活	335	作成	106
発達	318	工夫	102

また、サ変名詞句の抽出語間の関連性を探求するために、（表３）の出現頻度上位100位までを利用した抽出語間の共起ネットワークを用いて実施した。表３をみると、「指導」「記録」「保育」に「発達」「記入」「活用」がつながり、まとまりがある。「教育」「評価」「学習」「作成」「工夫」「改善」「計画」のまとまりがみられる。「理解」「活動」「意味」「行動」のまとまりもみられた。「活用」と「保護」の関わり、「生活」は「経験」「発達」「保育」「理解」「関係」など多くの関わりがみられる。「担任」は、「記録」、「行動」との関わりがみられた。



（図３）「幼児理解に基づいた評価」に関するサ変名詞句の抽出語間の共起ネットワーク

最も出現回数が多い抽出語の「指導」は、幼児を教育するうえでの教師の行動である。「保育」、「記録」、「教育」、「理解」、「生活」、「発達」、「評価」は、「指導」と同じく教育者の行動であるといえよう。また、サ変名詞句の共起ネットワークの「指導」「記録」「保育」に「発達」「記入」「活用」のまとまりからも、同じことがいえよう。そして、「教育」「評価」「学習」「作成」「工夫」「改善」「計画」のまとまりにおいても幼児教育の一連の活動であることがうかがえる。「理解」「活動」「意味」「行動」のまとまりも重要な教育活動を示している。「生活」と「経験」「発達」「保育」「理解」「関係」などとの関わりは、「生活」と密着した「経験」であり、「発達」である。そして、「保育」と「理解」「関係」も「生活」と密着したサ変名詞句である。

４．考察

今回の「幼児理解に基づいた評価」のテキストマイニングを行った結果、冒頭で述べた「保育」を展開することは、「幼児理解」を基部としていることが結論付けられた。更には、名詞句･動詞句･サ変名詞句のそれぞれの結果より導き出されたのは、ねらいと内容の５領域とのかかわりである。

幼稚園教育要領では、幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情･意欲･態度をみる内容は５つの視点で説明がなされているが、３．１の名詞句の結果から、出現した「内容」「言葉」「環境」は、５領域に関わる抽出語である。更には３．２の動詞句からは、「表現」「環境」「人間関係」「言葉」「健康」の５領域を網羅している。３．３のサ変名詞句の結果からは、幼児理解を根底とした評価を実施することが日常の生活、教育においてなされているといえよう。つまり、「幼児理解に基づいた評価」は、５領域に深く関わることのできる資料であることが言える。

至極当然であるが、幼児教育・保育には、小学校の各科目で構成される授業のように一律に定め

る「教科」という名のものは存在せず、幼児教育・保育をみる視点は別にある。

小学校同様に幼稚園や保育所にはクラスという集団グループがあるが、目まぐるしく成長を見せる０～５歳児は、同年齢の子どもたちであっても、早生まれから遅生まれと、月齢ごとで乳幼児期の子どもの育ちが大きく異なることに加え、それぞれの子どもらの興味・関心を向ける個を大切にする必要がある。このことからも保育の実践の場では、まずは幼児理解をすることから出発していくことが必然となるのだ。子どもたちの発達をしっかりと捉えることは無論のこと、これまでの経験や興味・関心といった実態、これまでに育ってきた環境から把握することが必要になる。どのように育ってほしいかと保育者の願い（ねらい）を踏まえて、幼稚園教育要領や保育所保育指針や幼保連携型認定こども園教育・保育要領にある具体的な内容を参考にしながら幼児の姿を重ね、活動を通して幼児が発達に必要な経験を得ていくように適切な援助を行っていく。

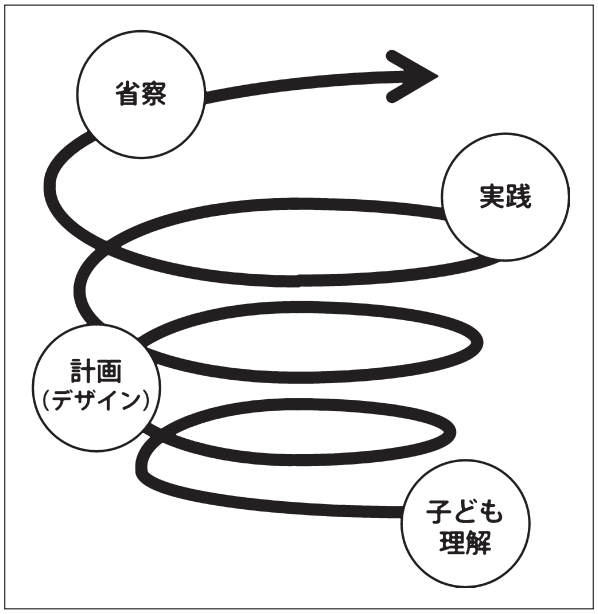
より良い幼児理解を実践するには、適切な援助を実践するための保育の計画が立てられていくが、前述した保育におけるねらい及び内容の目標である「育みたい資質・能力」を可視化したものを評価していくには、何を行うべきなのかについても抽出語によって明確に捉えることができた。

保育は、立案に基づいて実践され、その後は振り返りの時間を持つ。若林らは（2005 ）振り返り（省察）には、保育における４つの「知」（一般知・個人地・実践知・協働知）を結びつける働きがあると考えがあること述べている。省察によって新たな幼児理解が生じ、省察から再び幼児理解の視点が生まれる。幼児理解を出発点とした保育実践を、中坪らは（2011）は、「子ども理解の循環モデル」（図４）と呼び、保育方法を整えるためには、「幼児理解→保育計画（デザイン）→保育実践→省察」の「保育実践サイクル」理論を主張している。

教育現場でしばしば活用されているPDCAサイクル「〔計画－実践－省察－評価〕」も保育の構造理解を図るため実践現場にても活用されているが、「計画」を起点とした保育実践と「幼児理解」を起点とした保育実践があることが本データによって認識された。

津守（1987）も「幼児理解には最終的な正解を求めることはありえない」と、述べているように保育者は、日々保育のなかで、想定外の状況や新しい出来事においても、その時その瞬間に向き合い、幼児理解を追い続けていくことが必要となる。完璧な幼児理解など存在しないからこそ、保育者は、日々省察するのである。省察に基づく幼児理解の再構成の繰り返しこそが、保育の方法の微調整に繋がるのではないだろうか。

幼児教育・保育の営みは小学校以降の学習方法とは異なり、幼稚園・保育所・認定こども園は、生活全般が実践に当たる。保育の特定場面を対象に経験年数の異なる保育者のかかわりや視点を探り検討した（内藤・山内（2012）・高濱（2000）ら）研究によると、保育者が経験を重ねることにより、子どもに向ける関わりや援助を保育者の持つ目安によって子どもの成長を援助しようとする意識が変わっていくことが明らかにされている。



（図４） 幼児理解・計画・実践（デザイン）・省察の循環モデル
出典：小田豊・中坪史典編『幼児理解からはじまる保育・幼児教育方法』

また、中（1996）の研究では、経験年数による保育者の子どもへの発達観や指導観、子どもへの向き合い方が見られる保育観についての調査をしている。新人保育者は、子どもの行動面から保育をみる出発点に見ながら実践するのに対して、ベテランの保育者は子どもの興味や関心・主体性、心理面での視点に及ぶまで配慮しながら、多角的に子どもとの関わりを持とうとする心情がみられる特徴を捉えて明らかにしている。また、保育者の保育観の形成過程を検討すると、新任の保育者は子どものあるがままの姿を全て受けとめることが難しく、援助というよりは指導をしようとする傾向がみられ、絶対的な経験の差の違いについて述べている。

「幼児理解と評価」（文部科学省、平成31年）においては、保育者が適切な幼児理解をしていくために保育者の姿勢として大切にしたい点として４項目が取り上げている。①温かい関係を育てる②相手の立場に立つ③内面を理解する④長い目で見るとある。幼児理解の基本的な考えとなっていることは、保育者が子どもとともにあること、一人一人のありのままの姿に寄り添いながら、共感的態度を持って、子どもの気持ちに受容と共感的態度で肯定的に応えることである。保育者は、常に保育の原点として、これらの気持ちを持ち続けることによって、子どもとの間に信頼関係が構築されていき、保育者の雰囲気が、個から集団に伝わっていくのである。幼児理解とは、保育者の姿勢として納めるのではなく、自らの保育観として関連づけると良いのではなかろうか。

このように、保育者の生き方次第で、子どもに対する人的環境にも変化が生まれるであろう。別視点で子どもの周囲にある人間関係についてのデータも抽出ができたことに触れると、幼稚園教育要領領域「人間関係」の〔内容の取り扱い〕において、「教師との信頼関係に支えられて自分自身の生活を確立していくことが人と関わる基盤となることを考慮し、幼児が自ら周囲に働き掛けるこ

とにより多様な感情を体験し、試行錯誤しながら自分の力で行うことの充実感を味わうことができるよう、幼児の行動を見守りながら適切な援助を行うようにすること。」と示されるように、あくまでも一例に過ぎないが保育者がどのように幼児理解をすれば良いのかについての視点が、テキストの内容の中心に盛り込まれていることも明らかとなった。

５．まとめ

今回、膨大なデータが抽出されたことによって今後さらに検討を重ねていくこととなる。筆者らは保育者の幼児理解について、次のように考える。森上（1995）が主張している「保育者がその子をどう見ているか、その子にどうかかわっているかとか、他の子どもたちが、その子をどう見て、どうかかわっているかというような関係性のなかで、子どもの 能力や特性は形成されている」という認識を保育実践の根本的考えとしていくことが大切である。

今後の展開としては、今回収集されたデータは、幼児理解につながる重要な語句であると考えられつつも、しかしながら、重要なキーワードは抽出されても、テキスト自体のあまたの文章こそに、本当の重要な視点があることに気づく。

保育の営みは、河邊（2001）が示すように保育者の幼児理解によってその有り様が大きく異なると言われるほど、保育にとっての幼児理解は重要な基盤となる。したがって保育者は、日々の保育の中での子ども達とのかかわりを通して、岡田（2005）が述べるように、「それぞれの保育者としての生き方の中にある（子どもに向ける）理解を常に更新し続けていけるよう、子どもの内側に秘めるもの、背景や環境等、様々に予想しながら丁寧に幼児を理解し関わる必要がある」といえる。

特に、子どもが他者との関わりにおいては、認知発達の分野で取り上げられる、子どもの葛藤場面など、子どもが自分自身と向き合いつつ、心も体も大きく成長することができる重要な機会となるような、特に保育者の幼児理解の力を存分に発揮できるような場面などは、保育者の関わりや幼児理解の難しさこそあるものの、保育者としての喜びを味わえるような体験となるだろう。こうした幼児理解や指導に関する保育者の力量はすぐに身に付くものではない。保育者養成での学修段階から、継続的、発展的に幼児理解の幅を広げたり深めたりしながら学んでいくことの重要性を伝えることが重要となる。

子どもの心に寄り添い、幼児を理解しようとする保育者、子どもが夢中になっているものを追究する視点を持った保育者、単に保育者としての技術を習得することにとどまらない、人間として様々な子どもたちのありのままの姿に。柔軟に対応できる保育者に成長していくことへの価値を見出すことこそが幼児を理解することに繋がるのであろう。

参考文献

阿部眞弓・高向山・海野展由（2020）保育実習での評価の傾向に関する研究 -テキストマイニング分析による頻出語の可視化の試み-.

青木久子・間藤侑・河邊貴子（2001）子ども理解とカウンセリングマインド, ３章111-126, 萌文書林.

ベネッセ教育総合研究所（2019）第３回 幼児教育・保育についての基本調査.

樋口耕一（2021）KH Coder 3最終アクセス（2021. 6.）.
河邊貴子（1990）幼児理解と保育記録のあり方-子どもの遊び課題をどう読み取るか-,
第43回大会発表論文集，日本保育学会，520-521.
文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説.
文部科学省（2019）幼児理解に基づいた評価.
森上史朗（1995）保育実践の基礎を考える「発達」vol.16，ミネルヴア書房.
内藤由紀・山内淳子（2012）「片付け場面」における熟達した保育者の実践知，山梨学院短期大学
研究紀要, 32, 105-114.
中俊博（1996）保育者の保育観-幼稚園と保育所の比較からみた-,
和歌山大学教育実践研究指導センター紀要，6 , 129-142.
中坪史典・香曽我部琢・後藤範子・上田敏丈（2011）幼児理解から出発する保育実践の意義と課題
-幼児理解・保育計画（デザイン）・実践・省察の循環モデルの提案-子ども社会研究, 83-94.
岡田たつみ（2005）「私の中のその子」とのかかわり方，保育学研究，43－２：73-79.
小田豊・中坪史典（2009）幼児理解からはじまる保育・幼児教育方法，建帛社.
新村出2018．広辞苑（第７版），岩波書店.
杉村伸一郎・桐山雅子（1991）子どもの特性に応じた保育指導-Personal ATI Theory の実証的研
究-，教育心理学研究, 39, 31-39.
高濱裕子（2000）保育者の熟達化プロセス：経験年数と事例に対する対応,
発達心理学研究, 11, 200-211.
津守真（1987）子どもの世界をどうみるか，NHKフックス，日本放送出版協会.
友定啓子（1995）保育記録論（２）記述による幼児理解-理解しにくい子ども-保育記録論，255-263.
山内淳子・真宮美奈子・三神敬子・梶原美奈（2012）「自ら保育をとらえる視点」提示の試み
-砂場遊びにおける熟達した保育者の子どもへの言葉かけの特徴-，山梨学院短期大学
研究紀要,32,134-146.